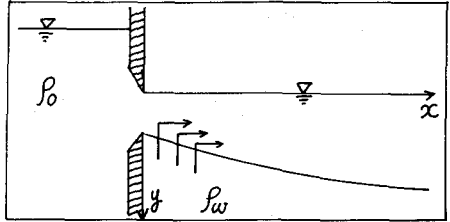


九州大学 正員 橋 東一郎
 " 正員 小松 利光
 " 学生員 〇井上 美公

1. まえがき この報告は、密度差を有する静止流体上へ水平方向に流体が噴出する密度噴流について考察したものである。理論面では、Goertler の二次元噴流の理論を擾動法により密度差を有する場に拡張した。

2. 理論 座標系を右図のように定義し、噴出する流体の密度を ρ_0 、静止流体の密度を ρ_w とすれば、運動方程式は次のように書ける。



$$u \frac{\partial u}{\partial x} + v \frac{\partial u}{\partial y} = \frac{1}{\rho} \frac{\partial \tau}{\partial y} - \frac{1}{\rho} \frac{\partial p}{\partial x} \quad (1) \quad \frac{\partial p}{\partial x} = \rho g_0 \quad (2) \quad \tau = \rho \epsilon \frac{\partial u}{\partial y} \quad (3)$$

体積及び質量欠損の保存式は、 ϵ_{mass} を渦動拡散係数として

$$\frac{\partial u}{\partial x} + \frac{\partial v}{\partial y} = 0 \quad (4) \quad u \frac{\partial}{\partial x} (\rho_w - \rho) + v \frac{\partial}{\partial y} (\rho_w - \rho) = \frac{\partial}{\partial y} \left\{ \epsilon_{mass} \frac{\partial (\rho_w - \rho)}{\partial y} \right\} \quad (5)$$

(1), (2) 式から圧力 p を消去し、 τ の表示として (3) 式を用いると、

$$u \frac{\partial^2 u}{\partial x \partial y} + v \frac{\partial^2 u}{\partial y^2} = \frac{1}{\rho} \frac{\partial^2}{\partial y^2} (\rho \epsilon \frac{\partial u}{\partial y}) + \frac{g_0}{\rho} \frac{\partial}{\partial x} (\rho_w - \rho) \quad (6)$$

次に、連続の式から流れ関数を定義すると、 $u = \frac{\partial \Phi}{\partial y}$, $v = -\frac{\partial \Phi}{\partial x}$ (7)

(6) 式を (5) (6) 式へ代入することによって、

$$\frac{\partial \Phi}{\partial y} \frac{\partial^2 \Phi}{\partial x \partial y^2} - \frac{\partial \Phi}{\partial x} \frac{\partial^2 \Phi}{\partial y^3} = \epsilon \frac{\partial^2 \Phi}{\partial y^4} + \frac{g_0}{\rho} \frac{\partial}{\partial x} (\rho_w - \rho) \quad (8) \quad \frac{\partial \Phi}{\partial y} \frac{\partial (\rho_w - \rho)}{\partial x} - \frac{\partial \Phi}{\partial x} \frac{\partial (\rho_w - \rho)}{\partial y} = \epsilon_{mass} \frac{\partial^2}{\partial y^2} (\rho_w - \rho) \quad (9)$$

homogeneous な場合に Goertler は Prandtl の第二級説より、 $\epsilon = k b U_{max}$ (10) とおき、噴出源からある距離 $x = S$ での軸上最大流速を U 、幅を b とすれば、 Φ , b , η はそれぞれ次のように示される。

$$\Phi(x, y) = b U \left(\frac{x}{S}\right)^{1/2} \psi(\eta) \quad b(x) = b_0 \left(\frac{x}{S}\right) \quad \eta = \frac{y}{b}$$

ここでは浮力の効果を取り入れ、しかも (10), (11) 式の関係を満足させるため、 $\Phi(x, y)$ を次のように展開する。

$$\Phi(x, y) = b_0 U_0 \left(\frac{x}{S}\right)^{1/2} \left\{ \psi_0(\eta) + (\alpha x)^{\alpha_1} \psi_1(\eta) + (\alpha x)^{\alpha_2} \psi_2(\eta) + (\alpha x)^{\alpha_3} \psi_3(\eta) + \dots \right\} \quad (11)$$

密度の分布についても同様に

$$\frac{\rho_w - \rho}{\rho_w - \rho_{min}(x)} = m(\eta) \quad (12)$$

従って、 $\rho_w - \rho = \rho_{00} \left(\frac{x}{S}\right)^{-1/2} \left\{ m_0(\eta) + (\alpha x)^{\alpha_1} m_1(\eta) + (\alpha x)^{\alpha_2} m_2(\eta) + (\alpha x)^{\alpha_3} m_3(\eta) + \dots \right\}$ (13)

(11), (13) 式を基礎式へ代入して、 (αx) の各べきについて整理する。ここで、境界条件を考えると、 $y=0$ で $v=0$, $u=U_{max}$, $\frac{\partial u}{\partial y}=0$, $\rho_w - \rho = \rho_0$, $\frac{\partial (\rho_w - \rho)}{\partial y} = 0$ 及び、 $y=\infty$ で $u=0$, $\frac{\partial u}{\partial y}=0$, $\rho_w - \rho=0$, $\frac{\partial (\rho_w - \rho)}{\partial y}=0$

従って、 $\eta=0$ で $\psi_0 = \psi_1 = \psi_2 = 0$, $\psi_0' = 1$, $\psi_0'' = \psi_1' = \psi_2' = 0$, $m_0 = 1$, $m_0' = m_1' = m_2' = 0$ 及び、 $\eta=\infty$ で $\psi_0 = \psi_1 = \psi_2 = 0$, $\psi_0' = \psi_1' = \psi_2' = 0$, $m_0 = m_1 = m_2 = 0$, $m_0'' = m_1'' = m_2'' = 0$,

homogeneous な場合に、Goertler の解 $\psi_0(\eta) = \tanh \eta$ をもつためには、 $b_0 = 4kS$ と定義し、 $(\alpha x)^{\alpha_i}$ についてまとめた方程式の両辺を比較することによって $\eta = \frac{y}{b}$ としてその値を代入する。

ここで 渦動粘性係数 ϵ と渦動拡散係数 ϵ_{mass} との比を Γ とおいて、境界条件を満足すれば

$$(\alpha x)^{\alpha_i} \begin{cases} \psi_0 = \tanh \eta \\ m_0 = \frac{1}{\cosh^2 \eta} \end{cases}$$

$$\begin{aligned}
 (\alpha x)^n \quad & \left\{ \begin{aligned} & \psi_1'' + \psi_1(\infty)\psi_0'' + 8\psi_1'\psi_0' + 2\psi_1''\psi_0 - 2\psi_1'\psi_0' - 4\eta m_0 - 2\int_{\eta}^{\infty} m_0 d\eta = 0 \\ & m_1' + \psi_1(\infty)m_0' - 4\psi_0'm_1 + 2\psi_1'm_0 + 8\psi_1m_0' + 2\psi_0m_1' = 0 \end{aligned} \right. \\
 (\alpha x)^m \quad & \left\{ \begin{aligned} & \psi_2'' + \psi_2(\infty)\psi_1'' + \psi_2(\infty)\psi_0'' - 8\psi_2'\psi_1' + 14\psi_2'\psi_0' + 2\psi_2''\psi_1 + 8\psi_2'\psi_1' - 4\eta\psi_2^2 - 4\eta m_1 - 8\int_{\eta}^{\infty} m_1 d\eta = 0 \\ & m_2' + \psi_2(\infty)m_1' + \psi_2(\infty)m_0' - 10\psi_1'm_2 - 4\psi_1'm_1 + 2\psi_2'm_0 + 14\psi_2m_0' + 8\psi_1m_1' + 2\psi_0m_2' = 0 \end{aligned} \right.
 \end{aligned}$$

ここで、 $(\alpha x)^n$ 、 $(\alpha x)^m$ の各べきの方程式の
 数値積分を施すことにより、 $\psi_0(\eta)$ 、 $\psi_1(\eta)$
 $\psi_2(\eta)$ 、 $m_0(\eta)$ 、 $m_1(\eta)$ 、 $m_2(\eta)$ が得られる。
 これを図に示したものが右図である。

また、 S 、 U_S 、 U_0 、 ρ_{S0} は次のようにして
 求める。

$x=S$ における全運動量は、 S 地帯が噴出口
 に近く密度勾配にもとづく x 方向の圧力
 勾配が無視できるとき、

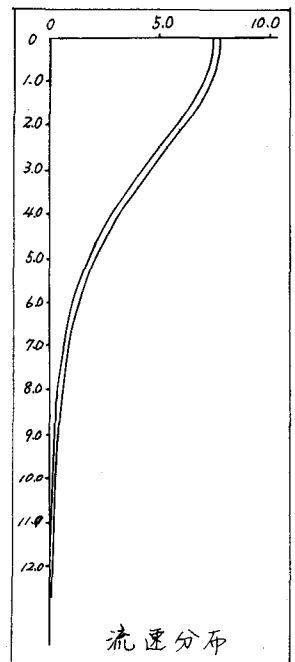
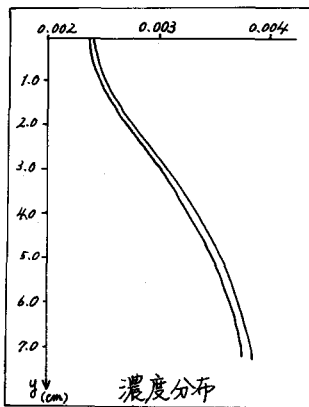
$$\begin{aligned}
 \rho_0 h_0 U_0^2 &= \int_0^{\infty} \rho u^2 dy = \rho U_0^2 \int_0^{\infty} \left(\frac{y}{h_0}\right)^2 \psi_0^2 dy \\
 &= \rho U_0^2 \int_0^{\infty} \psi_0^2 dy \quad (\text{ここで } y = \frac{h_0}{S} \eta)
 \end{aligned}$$

中心軸上 $x=S$ で $U_S = U_0$ とする距離 S を求めると $S = \frac{3}{2} \cdot \frac{1}{\alpha} \cdot h_0$

質量欠損の保存則より $(\rho_w - \rho_0) h_0 U_0 = \int_0^{\infty} (\rho_w - \rho) u dy$ これを解いて、 $x=S$ で $U_S = U_0$ 。従って $\rho_{S0} = \rho_w - \rho_0$

3. 解析 今までに述べてきた理論を基に、噴出口より30cmにおける流速分布、濃度分布を計算したものが

下図である。尚、算出するための条件
 として、噴出口の幅を0.40cm、噴出
 口における流速を20.0 cm/sec、静止流体
 の密度 ρ_w と噴出する流体の密度 ρ_0 との
 差を0.004とした。この図からも判断
 できるように $(\alpha x)^n$ のべきまで考えた
 数値は、 $(\alpha x)^m$ だけを考えたものより小
 さめの値を示している。またこの理論
 値によれば $x=30\text{cm}$ では、 $y=11.7\text{cm}$ 以下
 において流速は負値となり、二次元噴
 流の実験においてよく見られる逆流現
 象をよく現わしている。



4. あとがき 筆者らは現在、実験を行い理論値との比較を行、ている
 が、出口上端と下流水表面とが等しい表面噴流の場合であるので、Geortler
 の噴流理論における拘束係数 $\sigma = \frac{1}{\sqrt{2gH}}$ が妥当な値であるか疑問であり、表面
 噴流に適応した σ の値を考察している。また、その値を代入し実験値と比
 較すれば期待した結果が得られるだろう。

参考文献 1) Schlichting; Boundary-Layer-Theory, McGraw-Hill

2) 吉川・池田・川村; 躍層面へ噴出する二次元Jet, 第19回水理講演会論文集 (1975)